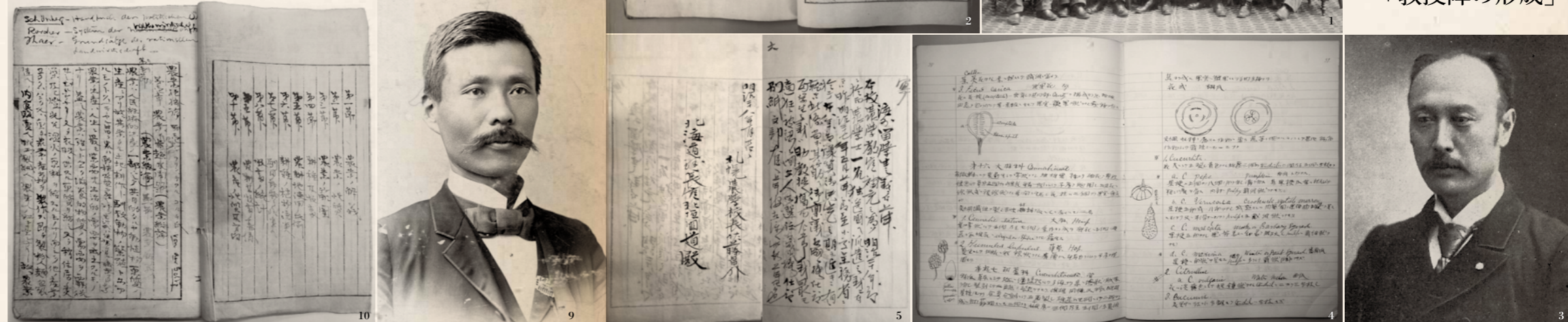


温故知新 北海道大学
挑戦の140年
 SCENE-7
1886-1894
 「教授陣の形成」



1. 札幌農学校教授陣と第11期生 (1893年 植物園蔵) 前列左から吉井豊造、南鷹次郎、宮部金吾、佐藤昌介、A.A.ブリガム、新渡戸稲造
2. 佐藤昌介「札幌農学校ノ組織改正ノ意見」(1886年 大学文書館蔵)
3. 札幌農学校校長佐藤昌介 (1900年頃 大学文書館蔵)
4. 第14期生平塚直治が記録した南鷹次郎講義「普通作物論」のノート (1894-95年 大学文書館蔵)
5. 第8期卒業生橋本左五郎ドイツ留学の手続き文書 (1895年 大学文書館蔵)
6. 札幌農学校校舎 (1900年頃 大学文書館蔵)
7. 最後の外国人教師A.A.ブリガム解職手続き文書 (1893年 大学文書館蔵)
8. ドイツ留学中の卒業生 (1901年 大学文書館蔵) 後列左から大島金太郎、松村松年、高岡熊雄
9. シカゴ出張中の南鷹次郎 (1893年 大学文書館蔵)
10. 佐藤昌介の講義ノート「農業経済学講義」(1888年 大学文書館蔵)



Hokkaido University HISTORY 1886-1894	
1886年	1月 - 北海道庁設置、札幌農学校を所管 8月 - 佐藤昌介帰国 11月 - 佐藤昌介が「札幌農学校ノ組織改正ノ意見」を北海道庁長官に提出 12月 - 佐藤昌介が札幌農学校教授に就任
1888年	佐藤昌介が「北海道殖民地ニ農学校ヲ必要トスルノ意見」を文部大臣に提出
1889年	9月 - 廣井勇、宮部金吾、南鷹次郎、吉井豊造らが教授に就任
1891年	3月 - 新渡戸稲造が教授に就任 8月 - 佐藤昌介が校長心得に就任 10月 - カリキュラムを大幅に改正
1893年	11月 - 最後の外国人教師A.A.ブリガムが離任
1894年	4月 - 佐藤昌介が校長に就任

大学文書館 だいがくぶんしょかん Hokkaido University Archives
 北海道大学に関する歴史的な資料を収集・整理・保存して利用に供するとともに、北海道大学史に関する調査・研究を行っている。

第一期生の佐藤を筆頭に、第二期生廣井勇、宮部金吾、新渡戸稲造、南鷹次郎らが教授陣を形成し、校務においても重責を担った。外国人教師から日本人教授陣への移行には、札幌農学校の最大の懸案であった経費削減という意味合いもあった。例えば、農学を教授したA.A.ブリガムの年俸は三三〇〇円であったが、同じく農学を担当する南鷹次郎の一九〇五年の年俸は九〇〇円であった。一人当たりの人件費を抑えることにより多くの教授陣を配置でき、しかも教授各人がより専門化した農学関係講義を担当することが可能となった。同時に学生が日本語で講義を受けられるようになり、英語講義を理解するために要する時間を、専門分化した講義内容の習得のために振り向けることが可能となった。以降も札

「論者アリ農学校ノ課程ヲ其不完全

札幌農学校は、卒業生を留学させた後、教授陣に編成していった。第八期生橋本左五郎(畜産学)、第十一期生大島金太郎(農芸化学)、第十三期生松村松年(昆虫学)、高岡熊雄(農政学)などである。

次の時代へのプロローグ

これまで外国人教師から英語で学んでいた西洋最先端の学問・技術を、留学などを経て教授に就任した卒業生が日本語で講義する体制となったことにより、札幌農学校は新たな段階に入ったといえる。教授陣の専門化した専攻分野は、一九〇七年の帝国大学昇格の際、学科・講座構成の基軸となった。そして、佐藤・宮部・南が教授陣の中心となる体制は、一九三〇年代まで続くことになった。

初期札幌農学校の教育体制

一八七六年の開校以来、札幌農学校には常に数名の外国人教師が在籍し、英語で農学・工学・化学・数学といった主要科目の講義をした。一八九三年までの十七年間に初代教頭W・S・クラークはじめ計十名の外国人教師が教壇に立った。西洋の最先端の科学を学ばせ、最先端の技術を習得させて、北海道「開拓」事業に資する人材を養成するというのが札幌農学校の目的であったためである。初期の札幌農学校では学校を管轄する開拓使・農商務省・北海道庁の役人が校長を務め、筆頭格の外国人教師が教頭または教頭心得として教務の責任者となる体制をとっていた。その体制が大きく変化するのは一八八六年からである。

「エース」佐藤昌介の校長就任

一八八六年、札幌農学校の所管が農商務省から新設の北海道庁に移った。折しも中央政府において、札幌農学校の教育は費用ばかりが嵩み、高尚に過ぎて、北海道「開拓」の実際に即していない、との批判が高まっていた。こうした札幌農学校の危機に、第一期生のリーダー格であった佐藤昌介が、留学先のアメリカから呼び戻された。佐藤は北海道庁長官に「札幌農学校ノ組織改正ノ意見」を提出し、札幌農学校批判への反論を展開した。佐藤は「札幌農学校の教育内容の問題は、その高尚さにあるのではなく、内容が広範に及び、しかも英語による講義に対応

評シテ高尚ナリトセリ雖然農学校課程ニシテナルモノハ高尚ナルニ非スシテ多端ナルニ依ル」

しなければならぬため、学生の負担が大きいため」と主張し、学校組織の改革を提案した。以降、北海道庁は佐藤の提案に基づいた改革を進めた。

同年十二月に、佐藤は札幌農学校唯一の教授に就任し、翌一八八七年には幹事を兼務した。同時に教頭心得であったW.P.ブルックスがその任を解かれた。佐藤が外国人教師に代わり教務責任を担う体制となったのである。一八九一年には北海道庁役人の校長が辞任して佐藤が校長心得に就任し、一八九三年に最後の外国人教師A.A.ブリガムが離任すると翌一八九四年に佐藤が正式に校長となった。ここに学校の全般にわたって佐藤が牽引する体制が確立した。

卒業生を中心とした教授陣の形成

この間、教育体制においては、外国人教師が主要科目を担当する体制から、第一、二期生をはじめとする卒業生を中心とした、専門分化した専攻分野を持った教授陣の形成へと移行した。一八九四年の札幌農学校の教授陣は表の通りである。

教授	主な担当	校務・役職	出身
佐藤昌介	講義	校長	第一期生
廣井勇	農政学	植物園主任	第二期生
宮部金吾	農政学	書庫主任(農園)	第二期生
新渡戸稲造	農学	農園(農場)主任	第二期生
南鷹次郎	農学	農園(農場)主任	第二期生
吉井豊造	農芸化学		第二期生